

ヴィヴェーカ・チューダーマニ（二二二―三四一）¹⁸⁸

―不二二元という生き方―

山 本 和 彦

〔アートマン〕

二二二 五つの蔵¹⁸⁹が推理によって排除され、それが限界まで排除されたならば、悟りの本質を持つ目撃者（アートマン）が残される。

二二三 このアートマンは自ら輝き、五つの蔵と異なるものであり、三つの状態¹⁹¹の目撃者であり、実在するものであり、変化しないものであり、汚れのないものであり、永遠の歓喜である。それは自分自身のアートマンであると、賢者¹⁹²によって知られるべきである。

弟子は言った。

二二四 実在しないものとしてこれら五つの蔵が排除されたとき、ここ（現象世界）には何も存在していません。¹⁹³それ以外、私には何も見えません。ああ師よ、自分自身のアートマンであると、賢者によって知られるべきどんな事物（実在するもの）が存在するのでしょうか。

師は言った。

二二五 賢者よ、あなたは眞実を語っている。あなたは思慮に優れている。自我などのような変化したものを、それ(変化したもの)がない状態¹⁹⁴をもまた、いま、¹⁹⁵

二二六 すべてを経験している者がいる。しかし、彼自身は経験されることがない。微細な感官によって、彼が知者であるアートマンであるとあなたは知るべきである。¹⁹⁷

二二七 およそ何者かによって知覚されたものにとって、その何者かは〔知覚されたものの〕目撃者となるだろう。しかし、何者によっても知覚されていない対象であれば、何者が目撃者なのか〔という考察〕は〔目撃者が存在しないので〕適切ではない。

二二八 これ(アートマン)は、自己認識する存在である。自分で経験するから。それゆえ、内なるアートマンが、それ自身で直接に最高のもの(ブラフマン)であり、他のものではない。

二二九 覚醒、夢、熟睡において、自らはつきりと現れるもの(アートマン)は、常に「私」「私」と同一の内なる姿で〔心臓の〕なかで輝いている。それ(アートマン)は、さまざまな形や変化を持つ自我や統覚(ディー)を始めとする〔多様な姿で現れる〕ものを見ている。それは常住であり、歓喜であり、知(チット)を本質としており、心臓のなかで輝いている。それは自分自身であるとあなたは知るべきである。

二二〇 瓶のなかの水に映る太陽の影像を見て、愚者は本物の太陽だと考える。そのように、愚者は「アートマンを」限定する属性（統覚）のなかにある知の影像を見て、誤ってまさに「私である」と考える。¹⁹⁸

二二一 賢者は、瓶と水とそのなかにある太陽の影像をすべて捨て去り、空の太陽を見る。それ（アートマン）は「三つに」無関心¹⁹⁹であり、これら三つ（瓶、水、影像）を照らし、自ら輝く。

二二二 そのように、身体を、統覚（デー）を、知（チット）の影像を捨て去り、統覚の洞窟のなかに隠れている目撃者であるアートマンを、不可分の覚知であり、すべてを照らすものであり、有無という「相對の」特徴を離れたものであり、

二二三 常住であり、遍在しており、遍満であり、微細であり、内外を持たず、自分自身に他ならないと、人は「アートマンの」このような本質を正しく知って、悪を離れ、激質を離れ、不死になる。

二二四 そのような賢者は、²⁰⁰悲しみを離れ、歓喜そのものになり、自ずと何も恐れなくなる。解脱を求める者が現生の束縛から解放されるには、自分自身の真理を体得すること以外に他の道はない。²⁰¹

〔ブラフマン〕

二二五 「自分自身と」ブラフマンとの不異性の識別知が、²⁰²現生からの解脱の原因である。覚者は、不二二元であり、歓喜であるブラフマンとなる。

二二六 ブラフマンとなったその覚者は、輪廻の世界に再び戻ることはない。²⁰³ それゆえ、アートマンはブラフマンと不異であると、人は正しく識別すべきである。

二二七 ブラフマンは実在、知識、無限、清浄、至高であり、自ら（他に依存せず）成立しており、永遠の歓喜という一味であり、内なるもの（アートマン）²⁰⁴と不異であり（梵我一如）、絶え間なく勝利する。

二二八 これ（ブラフマン）は、最高であり不二の実在である。これ以外のものは存在しないから。勝義諦（最高の真理）を完全に悟った状態では、他のものは何もない。

二二九 この全宇宙（現象世界）は多様な姿を持つと、無知ゆえに認められている。「しかし」そのすべてはブラフマンでしかない。それは、すべての過った考えを捨て去っている。²⁰⁵

二三〇 土から作られたもの（瓶）は、土と異なるものではない。瓶はどの部分でも、土を本質としているから。瓶の本質（土）と別のものは存在しないのに、なぜ瓶が存在するのか。瓶は虚妄分別された名称に過ぎない。²⁰⁶

二三一 瓶の本質が土と異なっていると、誰も示すことはできない。それゆえ、瓶とは無知によって虚妄分別されたものに過ぎない。真実なるもの、勝義（最高の真理）なるものは土である。

二三二 実在であるブラフマンから作られたすべてのものは、同じく実在である。そのすべてがそれ（ブラフマン）

であり、それと別なものはない。「別なものが」ある」と言うなら、その人の無知はまだ消滅しておらず、寝言のようなものである。

二三三 「この宇宙がブラフマンである」と『アタルヴァ〔ヴェーダ〕』所属の優れた天啓聖典が言う。それゆえ、この宇宙はブラフマンのみである。「上に」付託されたものは、「その下の」基体と異なるものではない。

二三四 もし世界がこのままで実在するなら、アートマンの無限性が損なわれ、天啓聖典の正しい認識手段性が失われ、さらに神が虚言者となってしまう。これら三つのこと（損、失、虚言）は、偉大な魂を持つ者にとって、善いことではなく、ためにもならない。

二三五 自在神は、事物の真理を知っており、「私はこれらのなかにいない」「これらは私のなかにない」と語る。²⁰⁵

二三六 もし宇宙が実在するなら、熟睡時でも認識されるはずである。その時、何も認識されない。それゆえ、宇宙は実在せず、夢のように虚妄である。

二三七 それゆえ、世界は最高のアートマンと別に存在しているのではない。別の認識は、属性などのように虚妄である。²¹⁰ 付託された姿に、何の意味があるだろうか。虚妄ゆえに、基体がそのように（付託された姿として）現れているだけである。

二三八 「心が」彷徨っている人が、錯覚して何を認識しても、それらはすべてブラフマンそのものである。実に銀に見えるものは、真珠母貝である。「これ」として常に言及されているものは、ブラフマンである。ブラフマンに付託しているもの（現象世界）は、名称に過ぎない。

二三九 それゆえ、最高のブラフマンは実在であり、不二であり、清浄な知識そのものであり、無垢であり、寂靜であり、無始無終であり、無活動であり、絶え間のない歓喜の精髓そのものである。²¹²

二四〇 「最高のブラフマンは」幻によって作られたすべての差異を超越しており、永遠であり、堅固であり、²¹³部分を持たず、認識対象にならず、姿形を持たず、非顕現であり、名称を持たず、不滅であり、自ら輝き、²¹⁴この何かとして輝いている。²¹⁵

二四一 「最高のブラフマンは」認識主体と認識対象と認識作用と（「いう区別」がなく、無限であり、分別しないものであり、単一で不可分の知そのものであり、最高の真理であると賢者は覚知する。

二四二 「最高の」ブラフマンは捨て去られるべきものではなく、受け取られるべきものではなく、心と言葉の領域を超えており、認識対象ではなく、無始無終であり、満たされており、偉大なもののなかで最も偉大なものである。

「あなたはそれである」という梵我一如」

二四三 「それ」と「あなた」という言葉で表現されているものが、ブラフマンとアートマンであることを明らかに

する「あなたはそれである」(梵我一如)²¹⁶ という天啓聖典によって、それら二つ(ブラフマンとアートマン)が完全に一つであることが繰り返り返し明らかにされる。

二四四 それら二つ(ブラフマンとアートマン)は、太陽と蜜のように、王と召使いのように、海と井戸のように、メル山と原子のように、お互いに矛盾した特徴を持つけれども、文字通りではなく意図された意味で一つであると見なされる。

二四五 それら二つの矛盾は、限定的属性によって虚妄分別されたものであり、この限定的属性は何か実在するものではない。神(イーシヤ)を限定する属性は、幻(マヤー)であり、大(マハット)などの原因である。個我(ジーヴァ)を限定する属性は、よく聞きなさい、「幻の」結果である五つの蔵である。²¹⁷

二四六 最高のもの(ブラフマン)と個我(ジーヴァ)とのそれら二つを限定する二つの属性が完全に除去されたとき、最高のものは最高のものでなくなり、個我は個我でなく(単なる実在に)なる。王は王国という属性に限定され、兵士は盾という属性に限定されている。それら二つが排除されれば、王は王でなくなり、兵士は兵士でなく(単なる人間に)なる。

二四七 「さて、それに関して教説がある」²¹⁸と天啓聖典が自ら、ブラフマンに対する二元性の虚妄分別を否定している。天啓聖典という認識手段によって支持される覚知によって、それら二つのもの(ブラフマンを限定する属性とジーヴァを限定する属性)が同様に否定されるべきである。

二四八 「主張」これ（は真実のブラフマン）ではない。これ（は真実のアートマン）ではない。²¹⁹「理由」虚妄分別されたものは真実ではないから。「喩例」繩を蛇と見るように。夢のように。このように正しい推論式によって、²²⁰見られたものを排除して、その後でそれら二つ（最高のブラフマンとアートマンである個我）は一つであることを知るべきである。

二四九 それゆえ、それら二つ（ブラフマンとアートマン）は比喩的に表現されており、「含意されている」意味が注意深く考えられるべきである。それによって、それら二つが不可分の精髓であることが成立する。すべてを排除するという方法ではない。すべてを排除しないという方法でもない。そうではなくて、両方の意味から成る方法で、成立させられるべきである。²²¹

二五〇 たとえば「彼（いまここにいる者）が、かの（以前別の場所にいた）デーヴァダッタだ²²²」とここで、矛盾する特徴（時間や空間など）の一部が排除されて、一元性が言われる。そのように、「あなたはそれである」という文章のなかで、両方（あなたと「それ」）の矛盾する特徴が排除されるべきである。²²³

二五一 実在（ブラフマン）とアートマンは知そのものであると知られることによって、「二つは」不可分の存在であると感じるによって認識される。同様に、何百もの大文章によって、²²⁴ブラフマンとアートマンの一元性と不可分性が語られる。

二五二 「粗大ではない」²²⁵云々が、この非実在なものを退ける。²²⁶それ（アートマン）は自ら成立しており、²²⁷虚空のよ

うであり、²²⁸ 思考の対象ではない。それゆえ、虚妄に過ぎないものを自分のアートマンであると固執してきたこの認識を排除すべきである。まさに「私はブラフマンである」という自分がアートマンであるという不可分の覚知を、浄化された感官（ブッディ）によって、²³⁰ あなたは得よ。

二五三 土から作られたものはすべて、たとえば瓶などは、常に単なる土に過ぎない。²³¹ そのように、実在（ブラフマン）から作られたものは、実在（ブラフマン）を本質とし、それらはすべて実在（ブラフマン）に過ぎない。²³² 実在（ブラフマン）以外には何も存在せず、それ（ブラフマン）は真実であり自分であり、それはアートマンである。それゆえ「あなたはそれである」。それは寂静であり、無垢であり、最高であり、不二のブラフマンである。

二五四 たとえば、夢のなかで妄想された場所、時間、対象、知者などすべてが虚妄（非実在）であるように、覚醒時のこの世界もまた自らの無知の産物である。同様に、この身体、器官、生気、自我などもまた非実在である。それゆえ「あなたはそれである」。それは寂静であり、無垢であり、最高であり、不二のブラフマンである。

〔二五四b〕 誤って妄想されたものに対して、それが識別されたなら、それ（ブラフマン）のみがあり、それ以外は決しない。夢のなかでは、さまざまな夢の世界が消えて行く。目覚めれば、自分以外の何かとして〔夢の世界が〕²³³ 経験されることは決しない。

二五五 生まれ、宗教、家族、種姓を超えているもの、名称と色形、損得を欠いたもの、場所と時間、対象を超えているもの、あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。²³⁴

二五六 最高のもの（ブラフマン）は、すべての言葉を超越しているが、無垢な覚知の眼によって認識対象となる。清浄な心そのものであり、無始であり、実在するもの、あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。

二五七 六種類の波と結びつかず、ヨーガ行者の心によって瞑想されるもの、感官によって知覚されず、統覚によっても知られず、非難されるところのないもの、²³⁷あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。

二五八 迷妄によって作り出された世界とその部分の基体であり、自らの基体であり、存在・非存在（相対）とは異なり、部分を持たず、比喩表現できず、壮大なもの、²³⁸あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。

二五九 出生、成長、発展、崩壊、病氣、死から解放されており、不滅であり、宇宙の発生と維持と消滅の原因であるもの、あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。

二六〇 差異がなく、捨てられない特徴を持ち、²³⁹波のない海のように動かず、常住の解脱者であり、不可分の姿を持つもの、あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。

二六一 唯一の実在であり、多くのものの原因であるが、他の原因によって作られることのない原因であり、結果（現象世界）と異なり、原因（幻）²⁴⁰とも異なり、それ自身で存在しているもの、あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。

二六二 無分別であり、無限であり、滅不滅（という相對）を特徴としない（絶対的な）不滅であり、最高であり、常住であり、不滅の樂であり、無垢であるもの、あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。

二六三 迷妄ゆえに、実在は名称と色形、属性、変化から成るさまざま姿で現れるが、金塊のようにそれ自身常に変化しないもの、あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。

二六四 後のもの（結果である現象世界）を超えて輝いているもの、最高のものを超えているもの、内にあるもの（個我、一味のもの、「最高の」アートマンを本質とするもの、存在・知・歎喜であり、無限であり、不滅であるもの、あなたはそのブラフマンであると心のなかで瞑想すべきである。

二六五 既述されたこれ（あなたはそのブラフマンである²⁴⁵）の意味（梵我一如）を、世間によく知られている推理によって理解して、心のなかで自ら瞑想すべきである。それによって、疑いなどは晴れ、掌の水のように真理の把握があるだろう。

二六六 自分を純粹な覚知であり完全に清浄な真理であると知って、軍隊のなかの王のように自分自身のアートマンのなかで永遠に安住する者は、全宇宙をブラフマンのなかに没入させる。

二六七 統覚という洞窟²⁴⁶のなかには、存在・非存在（相對）を離れ、実在であり、最高である、不二のブラフマンが存在する。それ自身（ブラフマン）として、その洞窟に住しているなら、再び肢体という洞窟に入ることはない。

〔潜勢力（ヴァーサナー）〕

二六八 実在するもの（アートマン）が知られても、強力で無始なる潜勢力が残っている。それは「私は行為者である」「私は享受者である」と頑な（人に思い込ませるもの）であり、その人の輪廻の原因である。それ（潜勢力）は、内観しアートマンとして生きる努力によって、排除されるべきである。沈黙の聖者たちは、現生で潜勢力の効果をなぐすことが解脱であると言う。

二六九 身体や眼など（感覚器官）というアートマンでないものに対して、「私である」「私のもの」と考えさせるこの付託（アディヤーサ）は、賢者が自らのアートマンに安住することによって、捨てられるべきである。

二七〇 統覚（ブッディ）とその変容したものを目撃する者を自らの内にあるアートマンであると知って、「私はこれである」と正しく解釈して、アートマンでないものに対してアートマンであると考えることをあなたは打ち捨てるべきである。

二七一 世間〔の常識〕に従うことを止め、身体〔が自分自身であるという考え〕に従うことを止め、「解脱に無関係な祭祀の」論書に従うことを止め、自分に対する付託（私である）「私のもの」という考えをあなたは除去すべきである。

二七二 世間〔に従うこと〕の潜勢力によって、論書〔に従うこと〕の潜勢力によって、そして身体〔に従うこと〕の潜勢力によって、人に知識が適切に生じなくなる。

二七三 輪廻という牢獄から解脱したいと願う者にとって、三つ（世間、論書、身体）の強力な潜勢力は鉄製の足枷のようなものであると、それ（ブラフマン）を知る者たちは語る。そこから解放された者が解脱を得る。

二七四 水などと触れて悪臭が充滿して、出て来なくなった沈香の妙香は、「沈香が」磨かれて周りの悪臭が完全に取り除かれたときに現れる。

二七五 心のなかに無限に存在する悪い結果をもたらす潜勢力という塵に覆われた最高のアートマンの潜勢力は、智慧によってしっかりと磨かれて浄化されれば、白檀の香りのようにはつきりと現れる。

二七六 アートマンでないものを求める潜勢力の集まりによって、アートマンを求める潜勢力は隠されている。常にアートマンに安住することによって、それら（アートマンでないものを求める潜勢力）が減したとき、「アートマンを求める潜勢力は」自ずと現れる。

二七七 心（マナス）が内（アートマン）に安住するにつれて、外界を求める潜勢力から「心は」解放される。すべての潜勢力から完全に解放されたとき、「解放された人は」妨害されることなくアートマンを体験することができる。

〔付託（アデイヤーサー）〕

二七八 自らのアートマンにのみ常に安住（瞑想）することによって、ヨーガ行者の心は減して行く。そして、潜勢力（ヴァーサーナー）も減する。それゆえ、あなたは自分の付託を取り除け。

二七九 暗質（タマス）は、二つ（サットヴァとラジャス）によって滅する。激質（ラジャス）は、純質（サットヴァ）によって滅する。²⁶⁰ 純質は、浄化されて滅する。²⁶¹ それゆえ、純質の助けを得て、あなたは自分の付託を取り除け。

二八〇 効果を發揮し始めた業が²⁶²身体を保持すると確実に知って「心を」不動にして、しっかりと努力して、あなたは自分の付託を取り除け。

二八一 「私は個我ではなく、最高のブラフマンである」と²⁶³それ（ブラフマン）でないものをまず否定して、あなたは邁進する潜勢力の結果である自分の付託を取り除け。

二八二 天啓聖典によって、推理によって、自らの直接体験によって、自分自身を、すべてを本質とするもの（アートマン）であると知って、²⁶⁴僅かでも付託が顕現すれば、²⁶⁵あなたは自分の付託を取り除け。

二八三 沈黙の聖者は、食物を食べても排泄しても、少しも行為していない。²⁶⁶「それゆえ」常にそれ（ブラフマン）に一意専心して、あなたは自分の付託を取り除け。

二八四 「あなたはそれである」²⁶⁷などの大文章から生じる梵我一如の覚知によって、「身体ではなく」ブラフマンがアートマンであることを堅固にするために、あなたは自分の付託を取り除け。²⁶⁸

二八五 この身体に対する私という考えが完全に消えるまで、注意深く、そして専心して、あなたは自分の付託を

取り除け。

二八六 個我と世界が、はっきりと夢のようなものだと分かるまで、そのときまで賢者よ、絶え間なく、あなたは自分の付託を取り除け。

〔身体〕

二八七 睡眠、世間話、音〔楽〕などによって〔アトマンを〕忘れてしまう状況を少しも与えることなく、自分のなかでアトマンを沈思せよ。²⁶⁹

二八八 父母の不浄なもの（精液と血液）から生まれ、不浄なもの（汚物）と肉からなる身体を、チャンダーラの²⁷⁰ように遠くに退けて、あなたはブラフマンとなり目的達成者となれ。²⁷¹

二八九 瓶のなかの空間が、宇宙空間と区別がなくなり溶け込むように、〔個人の〕アトマンを最高のアトマンに溶け込ませよ。〔二つは〕一つであると瞑想して、沈黙の聖者よ、常に沈黙せよ。²⁷²

二九〇 あなた自身が、自ら輝いており、現象世界の根元である実在そのもの（ブラフマン）になり、²⁷³宇宙と身体を捨てよ。汚物の入った容器を捨てるように。²⁷⁴

二九一 身体から生まれた私という考えを、存在・知・歓喜²⁷⁵であるアトマンに置き換えて、微細身を捨てて、あ

なたは永遠に唯一なるものになれ。²⁷⁹

二九二 都城が鏡に映っているように、それ（ブラフマン）のなかでこの世界が映っている。「私はそのブラフマンである」と知れば、あなたは目的達成者²⁸¹となるだろう。²⁸²

二九三 実在するものであり、自分自身の本来の姿であり、知識であり、不二の歓喜であり、姿形を持たず、行為しないそれ（ブラフマン）を獲得して、自分は身体であるという誤知を捨てよ。役者が衣装を脱ぎ捨てるように。

二九四 私が見ているこの全宇宙（現象世界）は虚妄に過ぎず、自我は決して実在するものではない。刹那滅であることが経験されているから。刹那滅である自我などの「私はすべてを知っている」という認識が、どうして成立しようか。²⁸³

二九五 しかし、私という言葉によって意味されるもの（アートマン）は、自我などの目撃者である。睡眠中であっても、常に存在することが経験されているから。実に天啓聖典自身が「（アートマンは）不生、常住である」と語っている。それゆえ、内なるアートマンは、存在・非存在²⁸⁵（という相対性）とは異なっている。

二九六 変化するものすべての変化を知る者は、当然（それ自身）常住であり変化しない。空想や夢想や熟睡中に、二つ（身体と自我²⁸⁷）が非実在であると繰り返し明瞭に見られる。

二九七 それゆえ、統覚によって分別された、肉塊を自分であると見なす誤見と肉塊を自分であると見なすもの（自我）を自分であると見なす誤見を捨てよ。自分自身を三時（過去・現在・未来）を超越しており、不可分の覚知であり、アートルマンであると知り、寂静（解脱）を得よ。

二九八 家族、種族、名称と色形、住期を自分であると見なす誤見を捨てよ。²⁸⁸それらは腐った死体となるもの（身体）が拠り所である。また、行為者であることなど微細身の属性も捨てよ。あなたは不可分の歡喜を本質とするものであれ。

〔自我（アハンカーラ）〕

二九九 輪廻の原因であり、「解脱を」妨害する他（自我以外）のもの²⁸⁹の存在もまた人間に見られるが、それらの根元は最初に「無知が」変化した自我（アハンカーラ）である。

三〇〇 自分自身が、苦を本質とする自我と結びついている限り、解脱の風評は少しもない。それ（解脱）は〔自我と〕相反している。

三〇一 自我の束縛から解放された者は、自分の本質を得る。彼は月のように無垢であり、満たされておき、永遠の歡喜であり、自ら輝く。²⁹⁰

三〇二 暗質によって過度に惑わされた統覚によって作られた「以前、私はこれこれの者であった」という認識が²⁹¹

完全に消滅した者は、妨害されることなく梵我一如を得る。

三〇三 ブラフマンの歓喜という宝は、自我という強力で恐ろしい蛇に取り巻かれており、三徳²⁹³からなる獯猛な頭によって、自分（自我という蛇）のなかで守られている。賢者は識別という名の光り輝く強力な刀剣によって、三つの頭を持つ蛇を完全に刎ねて、歓喜をもたらすこの宝を享受できる。

三〇四 もし、身体の中かに有害な毒が少しでも残っていれば、どうして健康でいられるだろうか。同様に、自我が残っていれば、ヨーガ行者でさえ解脱はない。

三〇五 自我を完全に滅して、それ（自我）に作られた多くの分別を破壊して、内なる真理（アートマン）を識別することによって、人は「私はこれである」²⁹⁴という真理を体得する。

三〇六 「私は行為者である」という（ように考える）自我を、「私である」と考えることを、あなたは直ちに止めよ。それ（自我）は変化を本質とし、アートマンの反射を受けているだけであり、自己（アートマン）の安住を奪う。そのような付託（自我を「私である」と考えること）ゆえに、あなたは生老死という苦に満ちたこの輪廻を経験してきたのである。あなたは内にあるもの（アートマン）であり、知が姿を持った者であり、歓喜が体現した者であるにも関わらず。

三〇七 永遠に同じ本質²⁹⁶であり、知を本質とし、遍満しており、歓喜が姿を持ったものであり、申し分のない栄光²⁹⁷

であり、決して変化しないあなたには、自我による付託（アディヤース）がなければ、この輪廻は決してない。

三〇八 それゆえ、食事中に小骨が喉に刺さった人がそれを取るように、あなたはこの自我という自らの敵を識別という強力な刀剣²⁹⁸で確実に切断し、アートマンという王国の歓喜を随意に享受せよ。

三〇九 それから、自我などの活動から退き、勝義（ブラフマン）を得ることによって、あなたは欲望を完全に捨て去れ。アートマンの歓喜を体験することによって、あなたは沈黙せよ。アートマンを「歓喜で」満たすことによって、あなたはブラフマンのなかで無分別になれ。

三一〇 強大な自我は、根絶されても一瞬でも心に描けば、蘇生して何百もの混乱を招く。雨季に風によって雲が集められるように。

三一一 自我という敵を降伏させて、対象を思惟する少しの余地も与えてはならない。それこそがまさにそれ（自我）が蘇生する原因である。枯れかけていたジャンビラ²⁹⁹の木に対する水のように。

〔潜勢力と輪廻〕

三二二 自分を身体であると考えて生きている者こそが、欲望を持っている。そう考えない者が、どうして欲望を持っているだろうか。それゆえ、対象に執着して考えを定めることこそが、二元論によって生じる現生の束縛（輪廻）の原因である。

三二三 結果が増えると、種子（次の原因）が増えることが見られる。結果が減ると、種子も減する。それゆえ、人は結果を減すべきである。³⁰¹

三二四 潜勢力（原因）が増えることによって、結果も増える。そして結果が増えることによって、潜勢力（次の原因）も増える。そのような人間の輪廻は、どのようにしても終わらない。³⁰²

三二五 輪廻の束縛を断ち切るために、苦行者はこれら二つ（潜勢力とその結果）を灰にすべきである。なぜなら、思惟と外界での行為との二つが潜勢力を増大させるから。³⁰⁴

三二六 これら二つによって増大し続けているそれ（潜勢力）は、人に輪廻を作り出す。これら三つ（潜勢力、思惟、行為）を減する方法は、どのような状況でも、どのような時でも、

三二七 どのような所にあるものでも、どのような所からのものでも、すべてはブラフマンのみであると見なすこととであり、それによって、実在するもの（ブラフマン）になる潜勢力が強くなり、その三つ（潜勢力、思惟、行為）は消滅する。³⁰⁵

三二八 行為しなくなれば、思惟も動かなくなるだろう。それに続いて、潜勢力もなくなる。潜勢力の完全な滅が解脱であり、それが現生解脱と認められる。³⁰⁶

三二九 実在するもの（ブラフマン）になる潜勢力が顕現するときに、自我など（実在しないもの）の潜勢力は消滅する。最も深い暗闇でさえ、曙の光が現れると、完全に消えてしまうように。

三二〇 暗闇とその結果として生じる多くの無益なものは、太陽が昇ると見られなくなる。同様に、不二の歓喜の味を体験するとき、束縛（輪廻）はなく苦の痕跡も見られなくなる。

三二一 外と内に意識を集中させる者は、知覚された対象を滅しつつ、歓喜のみからなる実在するもの（ブラフマン）を瞑想しつつ、まだ業の束縛があれば、〔業が減する〕時を待つがよい。

〔放逸（ブラマーダ）〕

三二二 ブラフマンに専心するときには、常に放逸すべきではない。「死は放逸である」とブラフマー神の御息子（サナトクマール）が言う。

三二三 知者にとって、自分自身の本質から放逸していること以上に無益なことは他にはない。そこから無知が、そこから自我が、そこから束縛が、そこから苦痛が〔それぞれ生じる〕。

三二四 賢者であっても、〔外界の欲望の〕対象に向かうなら、忘却はそれを見て、統覚（ディー）の過失によって、彼に〔自分がアートマンであることを忘れさせて、アートマンを現象世界として〕投影させる。若い女性が恋人を溺愛させるように。

三三五 水草を取り去つても、一瞬さえも留まらずに〔水草は再び水面を〕覆い尽くすように、〔内から〕顔を背け〔外を見〕れば、幻（マヤー）は智者でさえも覆つてしまふ。³¹⁶

三三六 もし心が目的（ブラフマン）³¹⁸から僅かでも逸れて外に向かうなら、その人は下へ下へと落ちて行くだろう。放逸ゆえに落とされた遊戯球が、階段から一段ずつ落ちて行くように。

三三七 〔外界の欲望の〕対象に入つて行く心は、それらの諸属性（樂を生むことなど）³¹⁹を思う。〔樂を〕強く思うことから欲望が生じる。欲望からその人は活動し始める。³²⁰

三三八 自分の本質から外れた人は〔自分の本質を〕失つて、墮落する。墮落した人は必ず破滅し、復活は決して見られない。人は〔外界の欲望の対象を〕思い巡らすことを止めるべきである。なぜなら、すべての無益なことの原因であるから。病人が健康に害のあるものを口にしないように。³²²

三三九 それゆえ、三昧中の識別者でありブラフマンの体得者にとつて、放逸を超える死はない。精神統一した者だけが、完全な成就を得る。あなたは自分の心を〔ブラフマンに〕注意深く集中させる者となれ。

〔相対性〕

三三〇 生きている間に独存状態になった者は、身体が滅しても独存者である。³²³ 天啓聖典の『ヤジュール（ヴェーダ）』は「少しでも違いを見る者には恐怖がある」と言う。³²⁴

三三一 そのような賢者³²⁵であつても、無限のブラフマンのなかで少しでも違いを見るときにはいつも、放逸のために違うように見えるものこそが、彼の恐怖〔の原因〕である。³²⁷

三三二 何百もの天啓聖典、伝承文学、論理によつて〔実在することが〕否定されている知覚対象（現象世界）を自分自身であると見なす者は、禁止されたことを行う盗人のように、次々と苦を経験する。³²⁸

三三三 真実に心が向かう者は、解放されアートマンの偉大性と永遠性を得る。虚偽に心が向かう者は、破滅するだろう。そのことは、盗人でない者と盗人の場合に見られる。³²⁹

三三四 苦行者は、束縛（輪廻）の原因である実在しないもの（身体など）に心を向けることを止めて、「私自身がこれである」とアートマンに専心して生きるべきである。なぜなら、自分のアートマンを体験することによつてブラフマンを成就すると、歡喜が生じて彼が経験してきた無明の結果である苦が完全に消滅するから。

〔感官の対象〕

三三五 外界に心を向けると、結果が増大するだろう。すると悪い潜勢力がますます増える。³³⁰ 識別によつてこのことを知つて、外界〔に心を向けること〕を避けるべきである。常に自分のアートマンに心を向けて、瞑想すべきである。

三三六 外界が遮断されると、意識は明瞭になる。意識が明瞭になると、最高のアートマンを経験できる。それが

しっかりと経験できたなら、現生の束縛が消滅する。外界を遮断することが解脱への道である。

三三七 学識者であり、実在と非実在を識別する者であり、天啓聖典を認識手段とする者であり、勝義「最高の真理」を見る者であり、解脱を求める者が、どうして子どものように自らの転落（輪廻）の原因であると知りながら、非実在であるもの（身体など）に執着するだろうか。

三三八 身体などに執着する者に解脱はない。解脱者は、身体などを自分であると執着しない。眠っている者は目覚めておらず、目覚めている者は夢を見ない。両者は属性の基体³³¹が異なるから。

三三九 彼は自分を知識であるアートマンであり、内と外にあるものや動かないものと動くもののなかにあるものの基体であると知って、すべての限定的属性を捨て、不可分な者となり、遍満するアートマンとして安住している。彼は解脱者である。

三四〇 万物とアートマン〔の同一視〕が、束縛から解放される手段である。万物がアートマンであること〔の認識〕以外のもの（手段）は何もない。³³² 知覚対象に執着することなく、常にアートマンに安住することによって、彼はこの万物がアートマンである状態を得る。

三四一 身体を自分であると思わして生きている者が、どうして知覚対象に執着しないことが可能であろうか。³³³ 彼の心は外界の対象を経験することに執着しており、さまざまな行為をなさうとしている。〔知覚対象に執着しないた

めには)すべての宗教的義務、祭式行為、「欲望の」対象を捨て、常にアートマンに完全に安住し、真理を知る者となり、心から努力して永遠の歓喜を求めるべきである。「続く」

註

- 188 山本和彦『ヴィヴェーカ・チューターマニ(七三―二二)―不二元という生き方―』(『佛敎學セミナー』第一一六号、二〇二二)の続編。註番号も前編から続く。
- 189 「五つの蔵」。VC 127註参照。
- 190 「自ら輝き」(svayamjyotiḥ)。VC 100註参照。
- 191 「三つの状態」とはVC 210の熟睡、夢、覚醒の状態。
- 192 「賢者によって」(vipaścītā)。Vyākhyā: vipaścītā vivēkakuśalena | 「賢者によってとは、正しい識別知によって【という意味】である」。
- 193 「何も存在していません」(sarvābhāva)。Madhavananda 1921によれば、空論者たち (the Sunyavādins) の説。VC 514参照。
- 194 「それ(変化したもの)がない状態」。Madhavananda 1921によれば、「熟睡状態」(during deep sleep)。
- 195 「いま」(atha)。Vyākhyā: atheadānim | 「いま(アタ)とは、いま(イダーニーム)【という意味】である」。
- 196 「微細な感官に於いて」(buddhyā sūksmayā)。VC 252の「浄化された感官(フッディ)によって」(suddhabuddhyā)と同じ。
- 197 KathU 3.12: esa sarveṣu bhūteṣu gūḍha ātmā na prakāśate | dīpate tv agryayā buddhyā sūksmayā sūksmadarśibhiḥ || 「すべてのもののなかに隠れているこのアートマンは、出現しない。しかし、微細な心の目を持つ人々が、微細な感官を専念させることによって【そのアートマンは】見られる」参照。「微細な感官を専念」とは一意専心 (ekāgra) のこと。VC 11註参照。
- 198 水に映った太陽の影像の例では、水が動いて水に映った太陽の影像が動いたとき、愚者は影像の太陽を見て、影像の元のもの(本当の太陽)が動いていると考える。しかし、本当の太陽は動いていない。この場合、本当の太陽は、影像の太陽という属性に限定されている。同様に、アートマンが統覚という属性に限定されている愚者は、統覚が行為すると自分が行為していると考ええる。しかし、自自身の本質はアートマンであり、行為を超越しており不動である。
- 199 「無関心」(tatasthita)。Vyākhyā: tatasthita udāśīnaḥ | 「無関心(タタステイタ)とは、無関心(ウダーシーナ)【という意味】である」。

- 200 「賢者は」(vipascit)。Vyākhyā: vipascit sarvajña ity arthah | 「賢者はとは、全知者はと、こう意味である」。
- 201 VC 224c: nānyo 'sti panthā ... | = ŚU 3.8: vedāham eam puruṣam mahāntam ādityavarāṇam tamasaḥ parasāt | tam eva vidivāṅmṛtyum eti nānyah
panthā vidyate 'yanāya || 私は「の」ブルシヤを知っている。彼は偉大な終末者であり、太陽の色をしており、暗闇の彼方にいる。まづに彼を知って、死を超えて行く。そこへ行くための他の道はない。「他の道」については VC 58 参照。「偉大な終末者」は VC 8 で既出。
- 202 Vyākhyā: brahmābhinnatvavijñānam abham brahmāsmitīy aparokṣānubhavah | 「自分自身と」ブラフマンとの不異性の識別知とは、「私はブラフマンでもある」ところ直接体験である」。
- 203 VC 226b: vidvān nāvartate punah | = ChU 8.15.1: na ca punarāvartate | na ca punarāvartate | 「彼は再び戻ることはない。彼は再び戻ることはない」。
- 204 「内なるもの(アートマン)」(pratyak)。VC 218 「内なるアートマン」(pratyagātma) 参照。
- 205 「捨て去る」(pratyasta)。「」では動詞語根「as は2類(存在する)ではなく4類(投げ捨てる)」。VC 515 参照。
- 206 CHU 6.1.4: yathā sonyaikena mṛtipiṇḍena sarvaṃ mṛmmyam vijñānam syāt | vācārabhanam vikāro nāmadheyam mṛtikey eva satyam || 「息子よ、たとえば一片の土塊によって土所成のもの(瓶)すべてが知られるように、変化したもの(瓶)は言葉が企てた名称である。「土」のみが真実である」：VC 192 参照。
- 207 VC 233a: brahmarvedam viśvam iti = MuU 2.2.11: brahmarvedam viśvam || 「この宇宙がブラフマンである」。
- 208 『アタルヴァ・ヴェーダ』所属の天啓聖典とは『ムンダカ・ウパニシヤッド』のこと。湯田二〇〇〇：五〇九参照。
- 209 VC 235bc: na cāham teṣv avasthiāḥ | na ca mat sīhani bhūtāni || = BhG 9.4d-9.5a: na cāham teṣv avasthiāḥ || na ca matsīhani bhūtāni || 「私はこれらのなかにいない。これらは私のなかにない」。「」では全宇宙がアートマンに遍充されていることが言われている。BhG 9.4ab: mayā itam idam sarvaṃ jagad ayyakamūrtiā || 「」の全宇宙は、非顕現な姿を持つ私によって遍満されている」参照。
- 210 「属性」(guṇa)。Madhavananda 1921 は「空の青色」と説明する。空という基体の属性は青色であるが、その本質はどちらも空であり、青色という別のものがあるわけではない。「」では、ブラフマン＝最高のアートマンとは別に、世界があるのではないと言われている。世界、宇宙は虚妄であり、実在するのは最高のアートマンだけである。
- 211 「これ」と「」(idamāya)。ブラフマンを十分に表現できる言葉はない。「これ」という指示語で精一杯である。VC 230 註参照。

- 212 TU 2.7: asad va idam agra asti tato va sad ajayata | tad atmānam svayam akurita tasmāt tat suktram ucyate || it || yad vai tat suktram | raso vai
 sah | rasam hy evāyam labdhvānandī bhavati | ko hy evānyāt kaḥ prānyāt | yad eṣa ākāśa ānando na syāt | eṣa hy evānandyañ || 「最初は非有が
 あった。そこから有が生じた。有は自らアートマンを作った。それゆえ、それはよく作られたものと言われる」と(いう詩頌がある)。
 そのよく作られたものとは、精髓 (rasa) である。なぜなら、まさにこの精髓を得て、人は歓喜ある者となる。もしも、虚空のなか
 にこの歓喜がなければ、誰が息を吸い、息を出すであろうか。なぜなら、これ(精髓)が歓喜させるからである」参照。歓喜
 (ānanda) との関係この「精髓」(rasa) は「タイテイリーヤ・ウパニシヤッド」では、「よく作られたもの」つまりアートマンのこと。
 かつアートマンを Olivelle 1998: 305 は「身体」(body) と解釈している。湯田二〇〇〇: 三五七も同様。佐保田一九七九: 一九七は
 「自我」。「歓喜の精髓」は VC 41 に既出。
- 213 Madhavananda 1921 は dhruvam (堅固) を sukham (楽) と読むが、VC 124 は「変化したもの」(vikāra) と「楽」(sukha) がアート
 マンであることは否定されている。
- 214 「自ら輝き」(svayamjyotiḥ)。VC 100 註参照。
- 215 「何かに」(kincid idam)。言語表現ではなく何かとして。VC 238 註参照。
- 216 VC 243c: śrutyā layos tat tvam asti ... | = CHU 6.8.7 = 6.12.3: tat tvam asi śvetaketo iti | 「シユヴェーターケートウよ、あなたはそれである」。
 VC 127 註参照。
- 218 VC 247: ahātā ādeśa iti śrutiḥ ... | = BĀU 2.3.6: ahātā ādeśa neti | 「つづ、それ(ブルシヤ)に関して、『非ず、非ず』という教説
 があふ」。BĀU 4.5.15: sa eṣa neti nety ātmā | agniyo na hi gñhyate | 「そのつづそれは『非ず、非ず』というアートマンである。それは把握
 対象ではない。把握されないから」参照。
- 219 Vyākhyā: nedam iti | prahamēdam śabdena īśopādhir māyā | dvitīyēdam padena kośapañcakam jīvopādhiḥ grāhyah pratyekam niśedham
 nāndvayayogah | 「これではないと。最初のこれという言葉によって、神を限定する幻が考えられる。二番目のこれという言葉によっ
 て、個我を限定する五つの蔵が考えられる。それぞれを否定するために、二つの否定が用いられている」。
- 220 「正しい推論式な」(sādhyuktyā)。Vyākhyā: sādhyuktyā śrūyamusūriyā yuktyā | 「正しい推論式によってとは、天啓聖典に従
 った推論式によって」(「ごう意味である」)。
- 221 Madhavananda 1921 は次のように説明する。間接表示 (laksanā) は二つの意味を含んでいる。第一は「排除」(yahan) であり、第一

義を排除する。例えば「ガンジス川のなかの牛がたくさんいる村」(gamyam ghosah)という表現は、「川のなか」(第一義)を意味しているのではなく「川沿い」を意味している。つまり、「川のなか」を排除して「ガンジス川沿いの牛がたくさんいる村」という意味にする。第二は「排除しない」(ajahan)であり、第一義を残しつつ、他の意味を付加して意味を明確にする。例えば「白いものが走っている」(sveto dhavati)という表現は、第一義の「白」を排除せずに「馬」を付加することによって「白い馬が走っている」と意味を明確にする。第三は「部分」(bhaga)であり、それぞれの言葉の含意された矛盾する部分を排除する。VC 250冒頭の「デーヴァダッタ」云々の表現がそれである。

222 「彼が、かのデーヴァダッタだ」(sa devadatio 'yam)という表現は、「彼」(ayam)の含意である「いまここにいる」と「かの」(sah)の含意である「以前別の場所にいた」という時間と場所の矛盾した部分を排除すると、「デーヴァダッタがいる」という矛盾のない意味になる。

223 「あなた」が指すアートマンと「それ」が指すブラフマンは、特徴が異なっているが、存在・知・歓喜という本質は同じである。Vyākhyā: tat tvam asi vākye karanopadhikāryopadhīpratyaktvaparokṣatvaparinmatvasadvividyāvādirūpān viruddhadharman ubhayatra hitvā 「あなたはそれである」という文章のなかで、原因としての限定的属性と結果としての限定的属性、内にあることと知覚できないこと、遍満していることと二元性があることなどの両方の矛盾した特徴を捨てて」。

224 「大文章」(mahāvākya)。天啓聖典のなかでの偉大な格言。梵我一如を表現する大文章としては、CHU 6.8.7 = 6.12.3: tat tvam asi 「あなたはそれである」や BĀU 1.4.10: aham brahmasmīti 「私はブラフマンである」などがある。ラーマーマヌジャ (Rāmānjan 1017-1137) は、この二つの文章を「浄化の文章」(śodhakāvākya)と呼ぶ。前田一九八〇:一九九参照。

225 VC 252a: asthulam ity... = BĀU 3.8.8: etad vai tad aksaram gāgi brāhmaṇā abhivadanty asthulam anany ahraṣyam adigham... 「ガールギーよ、それ(ブラフマン)は婆羅門たちが不滅のものと呼ぶものであり、粗大でなく、極小でなく、短くなく、長くなく...」。

226 「この非実在なものを」(etad asat)。Vyākhyā: etad dīśyamānam asat sūhūm sārīrādi 「これをとほ、見えているものをであり、非実在なものをとほ、身体など粗大なものを(とこう意味)である」。

227 「自ら成立」。VC 227 「ブラフマンは、自ら(他に依存せず)成立しており」参照。

228 「虚空」(vyoman)。虚空の特徴は遍満、不可分など。Madhavananda 1921は「不可触なもの」(unattached)と説明する。

229 VC 162註参照。

- 230 「浄化された感官(ブッテイ)によつて」。VC 216 「微細な感官によつて」と同じ。
- 231 VC 192, 230参照。
- 232 この世界はブラフマンが現象したものに過ぎない。実在するものはブラフマンのみであり、現象世界は夢のような幻であり、非実在である。この世界はブラフマンが展開(ブラパンチャ)したもので、戯論(ブラパンチャ)と言われる。VC 479参照。
- 233 Srirangan 1910と Sankaranarayanan 1973と Grimes 2004とはこの詩節はなご。
- 234 VC 255から264までのあいだで、十回同じ「あなたはそのブラフマンである」と心のなかで瞑想すべからぬ」(brahma tat tvam asi bhāvayātmam)とごうフレーズが続く。実際には「私はブラフマンである」(aham brahmasmi)と瞑想するのであろう。VC 162註参照。「瞑想すべからぬ」(bhāvaya)はウパーサナ(upāsana)やウパニシヤッド(upanīśad)と同義。「ケーナ・ウパニシヤッド」に似た表現があり、そこでも五回繰り返されている。KenU 1.8: tad eva brahma tvam viddhi nedam yad idam upāśate Ⅱ「これがまさにブラフマンであるとあなたは知るべきである。それは世間が念想しているようなものではない」参照。
- 235 「六種類の波」。Vyākhyā: sabbhir itī | ksuptipāse sokamohau jāraṁtyūrmīvat tarāṁgavat | 「六つと。飢えと渇き、悲嘆と無知、老死という波(ウールシ)のようなくまり波(タランガ)のようなものである」。
- 236 KenU 1.3: na tatra caksur gacchati | 「眼はそこに行かなら」; MuU 3.1.8: na caksusā grhyate | 「眼によつて把握されな」など参照。
- 237 「非難されること」のなごの」(anavadyabhatū)。ŚU 6.19: nīskalān nīskriyaṁ śāntān nīravadyaṁ nīrañjanam | amṛtasya param setum dagdhendhanam ivānalam Ⅱ「部分がなく、活動せず、寂靜であり、非難されるところがなく、無垢であり、不死への最高の架け橋であり、燃焼した薪のように輝く」(神に私は帰依する)」参照。
- 238 「壮大なもの」(iddhinat)。Vyākhyā: iddhinat “eśa sarveśvara” ityādīśuteḥ “satyakamah satyasankalpa” ityādīśuteḥ ca | 「壮大なものには彼はすべての主である」云々という天啓聖典の「言葉」がある。さらに「『真実の欲望と真実の意図』を持つアートマン」云々という天啓聖典の「言葉」がある。最初の天啓聖典は『マーンドゥウキーヤ・ウパニシヤッド』(Māndūkyaopaniśad) 六。次の天啓聖典は『チャーンドーギヤ・ウパニシヤッド』(Chāndogyopaniśad) 八・一・五。
- 239 「捨てられない特徴」(anapāśākaśama)。Sankaranarayanan 1973はブラフマンの定義である存在(sat)・知(rit)・歓喜(ānanda)と解釈する。Madhavananda 1921は whose essence is never non-existent (本質が決して非存在でないもの)と英訳する。
- 240 Madhavananda 1921と Sankaranarayanan 1973は「原因」(kāraṇa)を幻(māya)と解釈する。

- 241 BĀU 2.5.19: tad etad brahmāpūrvam **anapar-am** anantaram abhūyam | 「このブラフマンは、前も後も内も外もない」参照。こゝでは、「前」は原因、「後」は結果を意味する。VC 261では「原因」は幻、「結果」は現象世界。
- 242 BĀU 4.4.16: tad devā jyotiṣām jyotir āyur hopāsate nīrtam | 「神々はそれ(ブラフマン)を、光のなかの光として、不死の命として瞑想する」参照。シヤンカラによれば、ブラフマンは太陽神の光を照らす。BĀUBh *at* BĀU 4.4.16: taj jyotiṣām jyotir adityādijyotiṣām apy avabhāsakavā | 「それを光のなかの光として」。アーデイトヤ(太陽神)などの光さえも照らすから」。
- 243 MuU 2.1.2: aprāno hy amañāḥ śubhro hy akṣarāḥ parataḥ parāḥ | 「(ブルシヤは) 生気なく、意なく、清浄であり、実に不滅の最高のものを超えてくる」参照。「最高のもの」とは、Sankaranarayana 1973によれば、宇宙の創造者であるヒラヌヤガルバ(Hiranyagarbha)。
- 244 「存在・知・歓喜」(satyactsukha)。VC 154註参照。
- 245 「既述された」れ」とは、VC 255-264の「あなたはそのブラフマンである」(brahma tat tvam asi) という天啓聖典。VC 243註参照。こゝでは、教証を理証によつて理解すべきことがあることが言われている。
- 246 「洞窟」(guhā)。VC 134註参照。
- 247 Vyākhyā: vastuṃ ātmani jāte pi | 「実在するもの、つまりアータマンが知られても」。
- 248 潜勢力を意味するサンストリットとしては、vāsanaの他に saniskāra (潜在印象) ʼkarmaṇ (業) ʼāśaya (余力) ʼadṣṭa (不可見力) ʼapūrva (新得力) などがあがるが、VCでは vāsana という語が使われている。潜勢力とは行為の結果、業の余力であり、人の次の行為の原因となる眼に見えない力。
- 249 「アートマン」を『アディアートマ・ウパニシヤッド』(AĀU) は「ブラフマン」と読んでいる。
- 250 Vyākhyā: svāmanisṭhāyā svāmani brahmani nīrtam śhītirupanidhyāsaneṇa | 「自らのアートマンに安住することによつては、自らのアートマンであるブラフマンに完全に住してゐる姿である瞑想によつてである」。
- 251 VC 269: aham maneti yo bhāvo dehākṣādv anāmani | adhyāso ʼyam nirastavyo viduṣā svāmanisṭhāyā | = AĀU 1: aham maneti yo bhāvo dehākṣādv anāmani | adhyāso ʼyam nirastavyo viduṣā brahmanisṭhāyā ||
- 252 VC 138註参照。
- 253 VC 270: jātvā svam pratyagātmānam buddhiadvitīśāsīnam | so ʼham ity eva sadvṛtyātāmāny ātmamātīn jāti || = AĀU 2: jātvā svam pratyagātmānam buddhiadvitīśāsīnam | so ʼham ity eva tadvṛtyā svānyātāmānam tyajet ||

- 254 VC 269参照。
- 255 VC 271: lokānuvartanam yuktivā yuktivā dehānuvartanam | śāstrānuvartanam yuktivā svādhyāsāpanam kuru ||
yuktivā dehānuvartanam | śāstrānuvartanam yuktivā svādhyāsāpanam kuru ||
- 256 「それ(ブラフマン)を」。Vyākhyā: tajjñāh brahmavidah | 「それを知る者たちとは、ブラフマンを知る者たちである」。Grimes 2004:1 「それ」を「真実なるもの」(the Truth)と解釈する。
- 257 「安住することによって」(sthitvā)。Vyākhyā: sthitvā midhyāsāneney arthan | 「安住することによってとは、瞑想によってという意味がある」。
- 258 VC 278 ab: svātmany eva sadā sthitvā mano naśyati yoginah | = AĀU 4ab: svātmany eva sadā sthitvā mano naśyati yoginah |
- 259 「付託」(adhyāsa)。VC 181註参照。
- 260 BhG 14.10: rajās tamas cābhīhyā sattvam bhavatu bhārata | rajāh sattvam tamas caiva tamah sattvam rajās tatha || 「バーラタ(アルジュナ)よ。純質は、激質と暗質を圧倒して増大する。激質は、純質と暗質を圧倒して増大する。暗質は、純質と激質を圧倒して増大する」参照。
- 261 「浄化されて」Vyākhyā: suddhena nigunena | 「浄化されてとは、徳がなくなつて」。三徳のうち暗質と激質とがなくなつた、つまり浄化された純質は純質のみとなつて滅する。人は三徳がなくなつて、解脱する。VC 119 「純質は清浄であり、水のようなものであるが、それでも二つ(激質と暗質)と結合して輪廻する」：VC 176 「激質と暗質(タマス)がなくなつて浄化された心は解脱の原因となる」：BhG 14.20: guṇān eān atīya tīn dehī dehasamudhavān | jñānamṛtyujātdukhān vimukto nṛtam āsnute || 「身体から生じるこれら三徳を超越して、個我は生死老苦から解放されて、不死に至る」参照。なお、Sankarānanyāna 1973は、suddhena (浄化によって)を by the suddha (nirguna) Brahman (清浄な(無属性の)ブラフマンによつて)と英訳する。
- 262 「効果を發揮し始めた業」(pārabha)。業の消滅については、シャンカラはBSBh ad BS 4.113-15で詳しく述べている。中村一九八九a: 七七八-七七八〇参照。効果を發揮し始めた業は、享受つまり消化されて滅する。効果を發揮し始めていない過去に集積した業(samcita)と未来の業(bhāvīkarma)は、ブラフマンの知識によつて滅する。VC 450, 454参照。
- 263 VC 162註参照。
- 264 VC 282ab: śrutvā yuktivā svānubhūtvā jñātvā sāvāṅmyam āmanah | = AĀU 4cd: yuktivā śrutvā svānubhūtvā jñātvā sāvāṅmyam āmanah ||

265 「顕現」(abhasa)。あたかもそれである如くに現れてくること。繩は蛇として顕現することがある。鏡に映っている顔は、顔として

顕現する。前田一九八八・二七八参照。

266 「行為していいなら」。解脱者は行為しても業が生じない。BhG 4.20: tyaktvā karmaphalāsāngam niyatpīto niśśyañ | karmāny abhipravṛto
pi naiva kimcit karoti sah || 「行為の結果に対する執着を捨て、常に満足し、「他人に」依存しない人は、行為に従事していても、少し
も行為していい」: BhG 5.7:… kurvaṃ api na lipyate || 「(聖者は) 行為しても〔業に〕汚されない」参照。

267 VC 243註参照。

268 VC 251註参照。

269 VC 287: nidrāyā lokavartāyāḥ śabdāder api viśmithe | kvacin nāvasaram dattvā cintayātmānam ātmani || = AĀU 5: nidrāyā lokavartāyāḥ śabdāder
ātmaviśmithe | kvacin nāvasaram dattvā cintayātmānam ātmani ||

270 「不浄なもの(精液と血)から生まれ」。Vyākhyā: malodbhūtam suklaśonitājanyam | 「不浄なものから生まれとは、精液と血液から生
まれ(と、この意味)である」。

271 「不浄なもの(汚物)と肉からなる身体」。VC 156 「この身体は皮膚、肉、血、骨、汚物の堆積であり」参照。

272 「チャンドーラ」。インドの四カーストから除外された最下層民。

273 「目的達成者」(kṛtin)。VC 209註参照。

274 VC 288: mātāpitror malodbhūtam malanāṅsamayan vapuh | tyaktvā caṇḍālavad dūram brahmībhūya kṛti bhava || = AĀU 6: mātāpitror
malodbhūtam malanāṅ samayan vapuh | tyaktvā caṇḍālavad dūram brahmībhūya kṛti bhava ||

275 VC 289: ghatakāśam mahakāśa ivātmānam parātmāni | vilāpyākhaṇḍabhāvena tūṣṇiṃ bhava sadā mune || = AĀU 7: ghatakāśam mahakāśa
ivātmānam parātmāni | vilāpyākhaṇḍabhāvena tūṣṇiṃ bhava sadā mune ||

276 「実在そのもの(ブラフマン)に」(sadātmānā)。sadā-ātmānāと読めば「永遠のアートマンに」という意味になるが、sad-ātmānāと
読めば「実在そのものに」という意味になる。VC 377, 405, 416, 524, 547, 558参照。なお、VC 134: satvātmani (純質を本質とするもの
のなか) : VC 291: cidātmāni (知そのもの) : VC 417: ānandātmāni (歓喜そのもののなか)と、同じ表現もある。

277 VC 290: svapṛakāśam adhiśhānam svayambhūya sadātmānā | brahmāṇḍam api piṇḍāṇḍam tyajyatām malabhāṇḍavat || = AĀU 8: svapṛakāśam
adhiśhānam svayambhūya sadātmānā | brahmāṇḍam api piṇḍāṇḍam tyajyatām malabhāṇḍavat ||

- 278 「存在・知・歎喜」。VC 154註参照。
- 279 VC 291: cidāmani sadānande deharūdhām aham dhīyam | niveśya lingam utśiṣya kevalo bhava sarvadā || = AĀU 9: cidāmani sadānande deharūdhām aham dhīyam | niveśya lingam utśiṣya kevalo bhava sarvadā ||
- 280 VC 162註参照。
- 281 「目的達成者」(kṛtin)。VC 209, 288参照。
- 282 VC 292: yatraiśa jagadābhāso dapaṇāṅgaḥ puraṇ yathā | tad brahmāṅgaṁ iṁ jñātvā kṛakṛiyo bhaviṣyasi || = AĀU 10: yatraiśa jagadābhāso dapaṇāṅgaḥ puraṇ yathā | tad brahmāṅgaṁ iṁ jñātvā kṛakṛiyo bhaviṣyasi ||
- 283 アートマンは永遠であるが、自我は刹那滅。刹那滅であるものは実在しない。したがって、自我の認識は成立しない。アートマンの永遠性については、VC 295で「不生、常住」と言われる。
- 284 VC 295c: ajo nitya it... || = VC 460c: ajo nityah... || = KathU 2.18: na jāyate mriyate vā vipaścīn nāyaṁ kuṭścīn na babhūva kaścit | **ajo nityah** śāśvato 'yaṁ purāṇo na hanyate hanyamāne śarīre || 「知者(＝アートマン)は生まれず、死なない。彼は何かからなるのでなく、何者かになるのでもない。彼は不生、常住、永遠、太古の者である。身体が殺されても、[アートマンは]殺されない」|| BhG 2.20: na jāyate mriyate vā kadācin nāyaṁ bhūtvā bhaviṣā vā na bhūyaḥ | **ajo nityah** śāśvato 'yaṁ purāṇo na hanyate hanyamāne śarīre || 「主体(déhin)＝アートマンは」決して生まれず、死なない。彼は過去に存在するようになったことがなく、未来に存在しなくなることもない。彼は不生、常住、永遠、太古の者である。身体が殺されても、[アートマンは]殺されない」。この箇所解釈については、上村一九九二：一四七参照。
- 285 Madhavānanda 1921は「内なるアートマン」(pariyagāman)をthe Paramātmān (最高のアートマン)と訳している。内なるアートマンは実在であり、絶対的な存在であり、非存在と相対的な存在を超えている。
- 286 Madhavānanda 1921は「存在・非存在」(śaśasat)をthe gross and subtle bodies (粗大身と微細身)と訳している。Vyākhyāはvyaktavyakta (顕現と非顕現)と註釈している。
- 287 「二二(身体と自我)」。Vyākhyā: tayoh pūṇdarābhīmānoḥ | 「二二とは、身体とそれを自分であると見なす誤見を持つもの」。自我は身体を自分であると固執する。
- 288 「私はこれこれの者である」という誤見。VC 302註参照。

289 「他（自我以外）のもの」。Vyākhyā: anye 'hamkāraḍ anye | 「他のものとは、自我以外のものである」。Madhavananda 1921は「例えば欲望なく」(such as desires etc.)と説明している。

290 VC 30I: ahaṅkāragrahāṅ muktaḥ svarūpam upapadyate | candravat vimalaḥ pūrṅaḥ sadānandaḥ svayamprabhāḥ || muktaḥ svarūpam upapadyate | candravat vimalaḥ pūrṅaḥ sadānandaḥ svayamprabhāḥ || = AĀU 1I: ahaṅkāragrahāṅ

291 「以前」(pūrā)。Madhavananda 1921は pura (身体)と読む。

292 US 2.1.10: brahmanapuro 'do nrayo brahmacāry āsam gṛhasṭho vedānīm paramahansaṅparivṛat | 「私は、これこれの家系の婆羅門の息子です。以前、私は梵行者もしくは家住者でしたが、いまはパラマハンサ遊行者です」：前田一九八八・五一六参照。

293 「三徳」。純質 (satva) 、激質 (rajas) 、暗質 (tamas) の三つの徳 (guṇa) 。VC 106註参照。

294 VC 138註参照。

295 「アートの反射」。VC 105, 119, 130参照。

296 「本質」(rūpa) 。rūpaは永遠に変化しないもので、外觀を意味する色や形ではなく、存在・知・歓喜 (saccidānanda) とこの本質 (svarūpa) のrūpa。

297 「申し分のなく」(anavadya) 。VC 35註 (SU 6.19) : 「欠点なく」(niravadya) 参照。

298 「刀劍」。VC 82, 149, 303参照。

299 「ジャンベラ」(jambīra) 。枯れかけていても、水を与えると蘇生する。The Practical Sanskrit-English Dictionary (by Prin. Yaman Shivaram Apte) によれば「シトロンの木 (The citron tree) 。シトロンはインド原産のシカン科の常緑低木。

300 「執着」(paratva) 。Vyākhyā: arhasamdhānaparavam eva viśayānucīnānasakatvam eva | 「対象に執着して考えを定めること」が対象に執着して思惟すること」が【この意味】である。rūpaの paratva は saktatva (執着すること) と同義。

301 潜勢力による業の因果関係が言われている。VC 33での「結果」とは前の行為の結果であり、次の行為の原因となる。その原因とは次の行為を引き起こす「種子」である。「結果」とは前の行為から見てそう表現されるものであり、「種子」とは次の行為から見てそう表現されるものであり、相対的なものである。

302 潜勢力は結果を生じさせる原因としての力である。その結果は次の行為の原因となり、その原因は潜勢力を発揮することにより、次の結果を生じさせ、終わることがない。

- 303 業は知識の火によって「灰」になる。VC 49註参照。
- 304 VC 312を受けていると考えれば、「思惟」とは自分を身体と考えることであり、「行為」とは欲望に基づく行為である。一般的に考
えれば、思惟は身口意の三業のうち意業であり、行為は身業である。
- 305 VC 317: sarvatra sarvatah sarvabrahmanātravalokanāḥ | sadbhāvaśāśanād ārdhyāt tattṛayan layam āśnute || = AĀU 13: sarvatra sarvatah
sarvabrahmanātravalokanam | sadbhāvabhāvanād ārdhyād vāsanālayam āśnute ||
- 306 VC 318: kriyāṅśe bhavac cintānāśo 'smād vāsanāśayah | vāsanāprakṣayo mokṣah sā jīvanmuktir iśyate || = AĀU 12: kriyāṅśād bhavac cintānāśo
'smād vāsanāśayah | vāsanāprakṣayo mokṣah sā jīvanmuktir iśyate ||
- 307 「外」(bahih)。Vyākhyā: iyaṃ bhūr na san nāpi toyam na tejo na vāyur na khann nāpi taktāryajātam | 「この世界は実在するものではな
く、水も火も風も空もそれらの結果として生じたものもまた実在するものではない」。
- 308 「内」(antara)。Vyākhyā: na deho na cākāṣi na pñānavāyur mano nāpi buddhir na citam hy ahamdḥ | yad eśāṃ adhiṣṭhānahūtam viśuddham
sad ekam param yat tad evāham asmi | 「私は身体ではない。感官でも生気でも意でも統覚でも心でも自我でもない。私はそれらすべて
の根元であり、清浄なる唯一の最高の実在である」。
- 309 「業が減する」時」。業が効果を發揮し尽くして滅するまでの時間。VC 446註参照。
- 310 「放逸」(pramāda)。VC 199註参照。
- 311 VC 322c: pramādo mṛtyur iy | = MBH 5:42:4: ubhe satye kṣatṛyādypapravṛte mohō mṛtyuḥ sammatō yaḥ kavīnaḥ | **pramādanam vai mṛtyum**
aham bravāmi sadāpranādam amṛtāvam bravāmi || 「両方(死は存在すると死は存在しないという二つの考え)が真実であることは、最初
から認められている。詩人たちは死は無知であると考え、私は**死は放逸である**と言う。私は不死は不放逸であると言う。『マハー
バーラタ』のこの箇所では、死とは何かという議論なので、死を主語として訳した。
- 312 VC 322: pramādo brahmanīṣṭhāyām na kartavyah kadācana | pramādo mṛtyur iy āha bhagavān brahmanah sutah || = AĀU 14: pramādo
brahmanīṣṭhāyām na kartavyah kadācana | pramādo mṛtyur iy āhur vidyāyām brahmanāvādinah ||
- 313 「知者」(jñānin)。文脈からすると、自分自身の本質であるアトマンと身体や自我などアトマンでないものを識別できる識別
者 (vivekin) と同義であると思われる。
- 314 「賢者」(vidvān)。Vyākhyā: vidvānsam api vivekinam api | 「賢者であっても、識別者であっても(という意味)である」。知者

賢者、識別者は同義。

- 315 Vyākhyā: viksepayati naśātmabodhan karoti | 「投影させるとは、アートマンの覚知をなくさせる [という意味] である」。投影力に つづは、 VC 344註参照。
- 316 「覆って」。無明であるマヤーは、アートマンの輝きを覆う。遮蔽力については、 VC 344註参照。
- 317 VC 325: yathā pakṣīṣam saivālam kṣāmatīram na tūṣhāt | āvṛto tathā māyā prāññam vāpi parātmukham || = AAU 15: yathā pakṣīṣam saivālam na tūṣhāt | āvṛto tathā māyā prāññam vāpi parātmukham ||
- 318 「目的」(lakṣya)。Vyākhyā: lakṣyam brahma | 「目的とはブラフマンである」。 VC 23: 379註、 381註参照。
- 319 「これらの諸屬性(樂を生むことなど)」(tadguṇān)。Vyākhyā: tadguṇāns teṣu bhogaheturayānandajātādiguṇān | 「これらの諸属性とは、それら(対象)のなかで、享受することによって樂を生むことなどの諸屬性を [という意味] である」。
- 320 BhG 2.62: dhyāyato viśayān punśah sangas teṣūpajāyate | sanigat sanjāyate kāmāḥ kāmāt krodho bhijāyate || 「(欲望の) 対象を思うことか ら、人にはそれらに対する執着が生じる。執着から欲望が生じる。欲望から怒りが生じる」参照。
- 321 「無益なもの」(anartha)。 VC 320 「無益なもの」(anartha) : VC 323 「無益なもの」(anartha) 参照。
- 322 「病人が…ちうに」。この文章は Srīrangam 1910と Madhavanada 1921にはなご。
- 323 VC 330ab: jīvato yasya kaivalyaṁ vidhe sa ca kevalah | = AAU 16ab: jīvato yasya kaivalyaṁ vidheḥ pi sa kevalah |
- 324 「ヤジユル [ヴェエダ]」とは、その補遺である『タイティリーヤ・ウパニシャッド』のこと。湯田二〇〇〇: 三四一参照。 TU 27: yadā hy evaiśa eśāmin udaram antaram kurute 'tha tasya bhayaṁ bhavati | 「実(人)が少しでもそれ(虚空)のなかに別のもの(空間)を 作る(空間は虚空と違うと考える)とき、彼には恐怖が生じる」参照。ブラフマンと現象世界に違いがない例として、虚空と空間に 違いはないことが言われている。 VC 289参照。
- 325 「そのよつな賢者」(vipaścid eśāh)。 Vyākhyā: eśo vipaścid vivēki brahmanvī | 「そのよつな賢者とは、識別者であり、ブラフマンを知 る者である」。
- 326 ブラフマンとブラフマンが現象したもののこつづは、 VC 253註参照。
- 327 「恐怖(の原因)」(bhaya)。 BĀU 1.42: dvitīyād vai bhayaṁ bhavati | 「#x02第二のものから恐怖が生じる」。
- 328 熱した斧で手を焼かれて、殺されるつづ。 VC 333註 (Chu 6.16.1-3) 参照。

329 CHU 6.16.1-3: puruṣam somyā hastagṛhnam ānayanī | apahatāṣṭi steyam akaraṣṭi paraṣum asmai tapateṭi | sa yadi tasya kartā bhavati tata evāṅgṛnam ātmānam kurute | so 'nṛtāḥsambho 'nṛtātmānam antardhāya paraṣum tapam praṭigṛhātī | sa dahyate | atha hanyate || atha yadi tasyākartā bhavati | tata eva satyam ātmānam kurute | sa satyāḥsambhah satyentāmānam antardhāya paraṣum tapam praṭigṛhātī | sa na dahyate | atha mruyate || sa yathā tara nādāhyeta | etad ānyam idaṁ sarvam | tat satyam | sa ātma | tat tvam asi śvetaketo iti | tad dhāsyā vijāhāv iti vijāhāv iti || 「息子よ、両手を縛られている人間を人々が連れて来て『彼は奪った、彼は盗みを働いた、彼のために斧を焼け』と言う。もし彼がそれ(盗み)を行った者であれば、彼は自分自身を虚偽にする。彼は「自分は盗んでいない」と偽りを述べ、偽りによって自分自身を覆い、熱せられた斧を掴む。彼は焼かれ、そして殺される。しかし、もし彼がそれを行っていないならば、彼は自分自身を真実にする。彼は(自分は盗んでいないと)真実を述べ、真実によって自分自身を覆い、熱せられた斧を掴む。彼は焼かれず、そして解放される。そのとき、彼を焼かせなかったのは、万物の本質をなすものである。それは真実である。それはアートマンである。お前がそれである、シュヴェータケートゥよ」と(父ウッダーラカ・アールニは、息子シュヴェータケートゥに言った)。それを確かに父から彼は学んだ。彼は学んだ」。

330 「結果」と「潜勢力」については、VC 314で既出。潜勢力が増えると結果も増える。結果が増えると次の結果の潜勢力も増える。

331 「属性の基体」は、身体に執着する輪廻者にとっては身体であり、解脱者にとってはアートマンである。身体という基体には輪廻という属性があり、アートマンという基体には解脱という属性がある。輪廻者は自分を身体を考え、解脱者は自分をアートマンと見なす。

332 BĀU 4.4.23: sarvam ātmānam paśyati | 彼はすべてをアートマンであると見る」。KaivU 10: sarvabhūtasam ātmānam sarvabhūtāni cātmāni | sarvapeśyan brahma paramam yāti hanyena hetuṇa || 「人は万物のなかにアートマンを見て、アートマンのなかに万物を見て、最高のブラフマンに至る。他に手段はない」参照。

333 VC 335で外界に心向けず、内なるアートマンを瞑想すべしと説かれている。